秋野豊筑波大学助教授

第３回報告会　講演録

旧ソ連諸国におけるカザフスタン情勢

―カザフスタン共和国副大統領をお迎えして―

1995年6月20日（火）

於キャピトル東急ホテル

主催　笹川平和財団

目 次

第一部　秋野豊筑波大学助教授の講演 ―― 1

現在のカザフスタンの状況 1
カザフスタンの特徴 1
1．地政学的に重要な位置（セントラリティ） 1
2．豊富な天然資源 3
3．広大な領土 4
4．CIS政治（中央アジア政治）における重み 5
5．サンドイッチ－ロシアと中国、ロシアとイスラム 5
6．タジキスタン紛争 5
7．国の重心の変化とウズベキスタン 6
8．カスピ海開発問題とパイプラインルート 7
9．今後の民主主義のあり方と経済発展モデル 7
10．東アジアそして日本との関わり 8

第二部　アサンバイエフ副大統領の講演 ―― 9

はじめに 9
日本の財界とカザフスタン 9
カザフスタンへの投資の可能性 9
中央アジアにおける政策と役割 10
ロシアとの関係 11
遷都問題 11
ナザルバーエフ大統領の政治姿勢 12
石油パイプラインルート 13
対中国関係 13
鉄道路線計画 13
タジキスタン紛争 13
独自の市場経済導入モデル 14

第三部　質疑応答 ―― 15

後記 ―― 15

秋野豊助教授プロフィール

1950年生まれ
早稲田大学政治経済学部卒業
北海道大学法学部修士　北海道大学博士課程修了（法学博士）
北大法学部助手、英国国費留学生としてロンドン大学に学ぶ
在モスクワ大使館でソビエト外交政策調査員
現在、筑波大学助教授
1992年9月より東西研究所のヨーロピアン・センター（在プラハ）主任研究員
1994年4月帰国

第一部　秋野豊筑波大学助教授の講演

現在のカザフスタンの状況

本日はカザフスタン共和国のエリック・アサンバイエフ副大統領をお迎えして、カザフスタンと中央アジアにしぼったお話しをさせていただきます。まだそれほど目立った動きにはなっていませんが、ひじょうにタイムリーなテーマだと思います。今後半年から1年以内に、大きな意義深い変化が起きるのは間違いないと思うからです。

カザフスタンの特徴（資料1）

1．地政学的に重要な位置（セントラリティ）

カザフスタンの特徴は、まず第1に地政学的に重要な位置にあるということです。中央アジアにはかつて旧ソ連に属していた共和国が5つあると言われていますが、詳しく申しますと中央アジアに属しているのはキルギスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタンの4つであり、これらとロシアとは直接国境を接しておりません。カザフスタンは特別に扱われております。正確には、ロシアの南にあるのはカザフスタンと4つの中央アジア諸国と言った方がいいと思います。その理由は、カザフスタンという国は下の部分で中央アジアに属していますが、上の部分はシベリアに属しているという面があります（資料2）。人口的にもかつては半分ほどスラブ系の人間がいましたが、ここ1～2年でスラブ系が流出しておりますので、少しカザフなど中央アジア系のほうが多くなっていると思いますが、その意味で地理的にも人口的にも文化的にも2つに裂かれた国であるということです。

それから、中国と接しております。またカスピ海を通じてコーカサスに通じており、欧州につながっていきます。東アジアと通じ、南アジアに通

資料1　カザフスタン

地政学的に重要な位置
天然資源
広大な領土

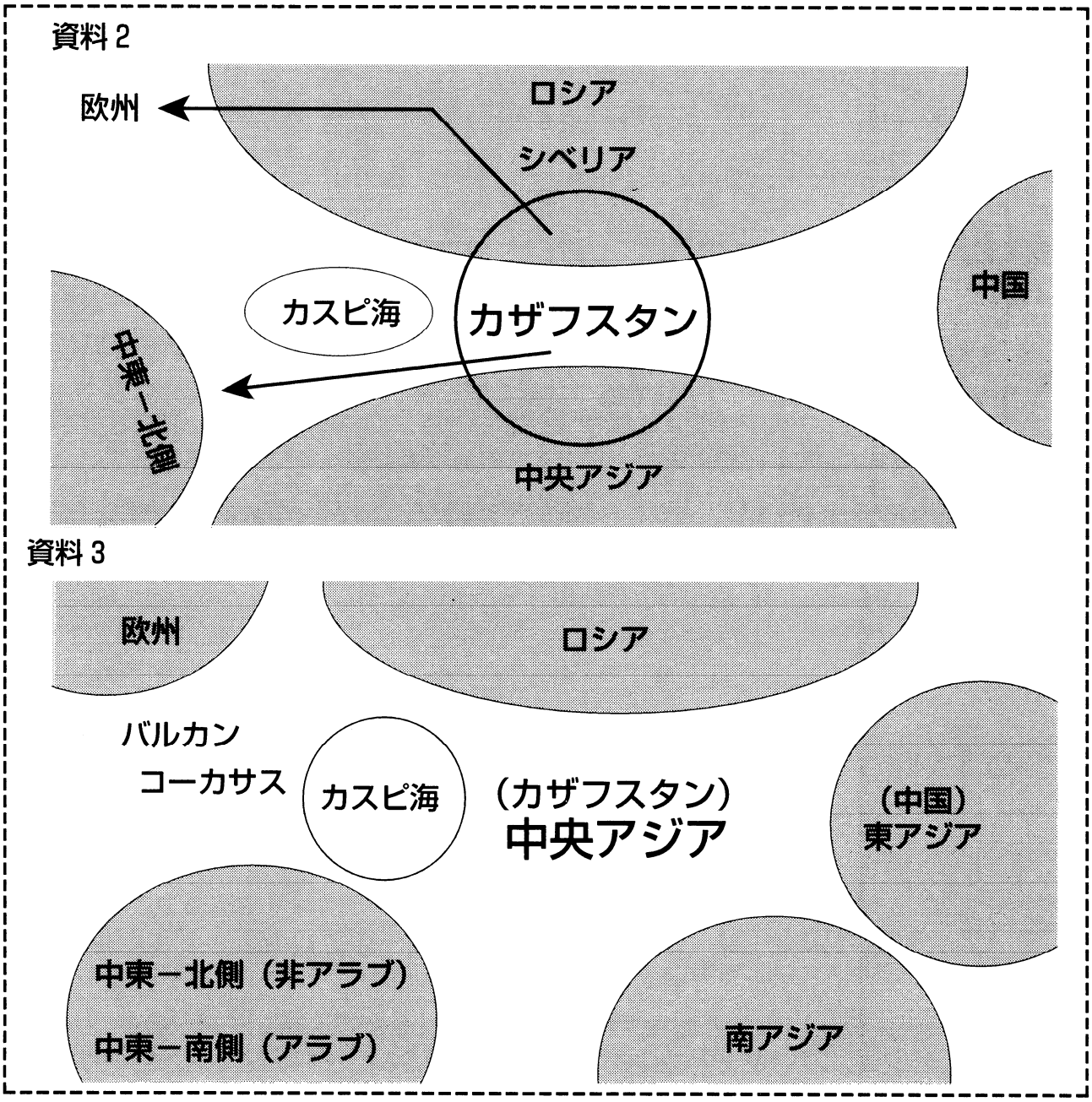
CIS政治（中央アジア政治）における重み
スラブとイスラムおおよびアジアとの橋

サンドイッチ；ロシアと中国
　　ロシアとイスラム
ロシア（人）との関係；プラスとマイナス
国の重心の変化とウズベキスタン
カスピ海開発問題、パイプラインルート

今後の民主主義のあり方、経済発展モデル
東アジアそして日本との関わり

じていますが、正確にいえば、ロシアから見ると中央アジアというのは南アジアにつながっておりますが、その中央アジアとロシアとの間に大きく介在するのがカザフスタンです。カザフスタンの政治経済の発展がロシアにとって好ましくない方向に行きますと大きな壁になります。つまり、ロシアは中央アジアに対して、出口、入口を失うことになります。しかしカザフスタンとの関係がよければ、ロシアの影響力は南下していくことになります。これがカザフスタンの特徴です。

カスピ海の東にはタジキスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、トルクメンという4つの中央アジアの国があります。ロシアは、カザフスタンの北部を覆うような形で中央アジアに入っています。ここの国境線はひじょうに長く、7500キロあります。したがってカザフスタンとロシアの関係が悪くなると、ロシアは7500キロ分の新しい国境を守るインフラを作りながらここに軍隊をはりつけなければなりません。カザフスタンとの関係がよければ、キルギス・中国の国境で守るか、タジク・アフガンの国境で守ることが可能になります。その意味でひじょうに重要な位置を占めてお



ります。

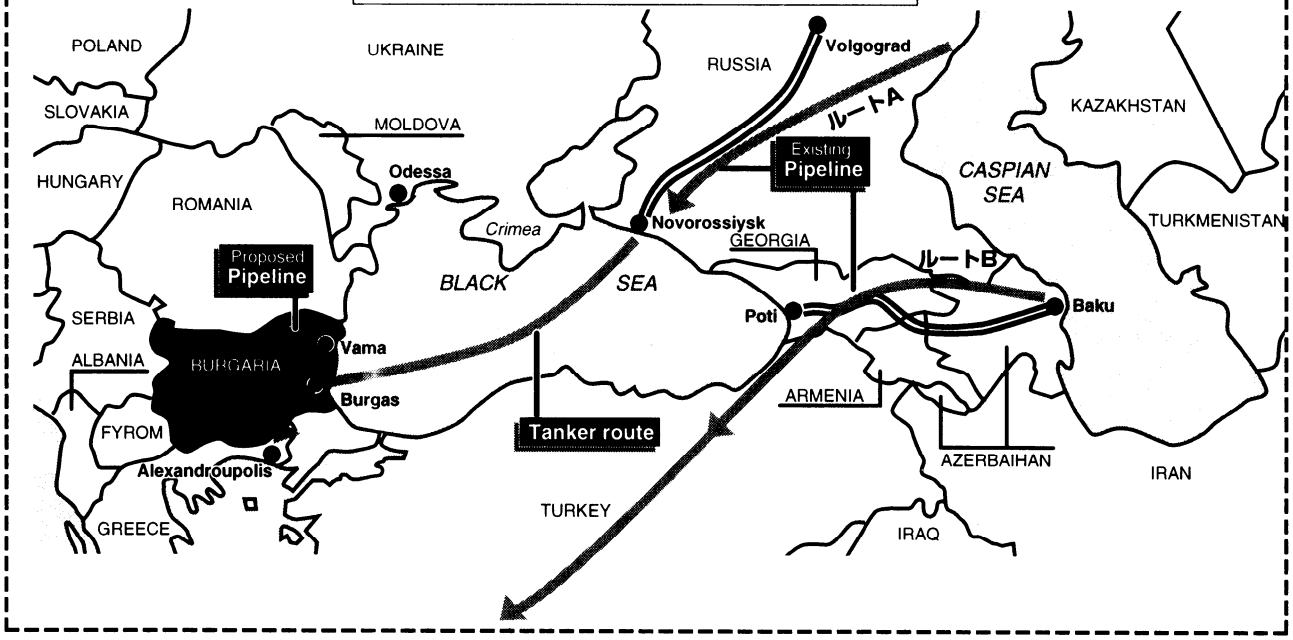
前述のように、カザフスタンは地理的に重要な位置を占めております。中央アジアの中では少し上の方に位置していますが、中央アジア、東アジア、スラブのロシアの世界、それから欧州、中東という中央アジアから視点を高くして、ユーラシアの中心部に目を落とすならば、ちょうどこれらの真ん中に入っていると言えます。またカザフスタンには、アジアとヨーロッパとの間の陸路では最短距離の鉄道が走っています。これが整備されるとひじょうに大きな意味が出てきます。もちろんこれがかつてのシルクロードであることは申すまでもありません。そういう意味で大きく見ると地理的にカザフスタンはセントラルであると言えます（資料３）。

２．豊富な天然資源

次に重要なのは天然資源ですが、石油とガスがカスピ海の周辺のテンギスや上のシベリアよりのところにかなり埋蔵されております。いま問題が出ておりますので、後で副大統領にこの辺の詳しい埋蔵量や開発方法についてお聞きしたいと思います。カザフスタンの弱さの１つは、多くのガスや石油を持っているにもかかわらず、原油採掘と精油のコーディネーションがうまくいっていないことです。カザフにある精油所はロシアでとれたものを精油することになっており、カザフでとれたものはどこか他へ運んで精油しなければなりません。これがカザフスタンの１つの弱さだと思いますが、これをどうされるのかということもお聞きしたいと思います。

それから後でまた詳しく述べますが、ここで採れたガス・石油をどのルートで西側に回すのかということです。いまのところだいたいの流れはここ半年ほどで見えてきましたが、カスピ海からノボロシスクに通してここからブルガリア、ギリシャに通すという形で決まってきています（資料４、ルートＡ－北ルート）。ただ問題なのは、このパイプラインだけではここで算出されたものをすべて運ぶ能力がないことです。それはそれで後にどうするかを考えるというのが現在のロシアやカザフスタンの立場です。１つの考え方としては、カスピ海を横切ってバクーにもってきて、それからトルコにもってくるというロシアを経由しないパイプラインの計画があります（資料４、ルートＢ－南ルート）。それからトルクメニスタンのガスと合わせて、イランからトルコを通じて西側に

資料４　カスピ海周辺からのエネルギールート



出すという南のルートもあります。こちらをとると、ロシアにとっては頭痛の種になります。全部ここ（ルートA―北ルート）で回すことができれば、ロシアにとって戦略的にまた経済的にいいシナリオですが、そこまでできるかどうかわかりません。もしカザフスタンが南でこのように動き始めると、ウズベキスタンやその他の国も、南で石油を流そうとし、その部分はロシアにコントロールされまいとする力学が働きますので、ずいぶんこの辺の政治経済情勢は変わってくると思います。その辺はまだ決まっていないと思いますが、そういう問題があります。

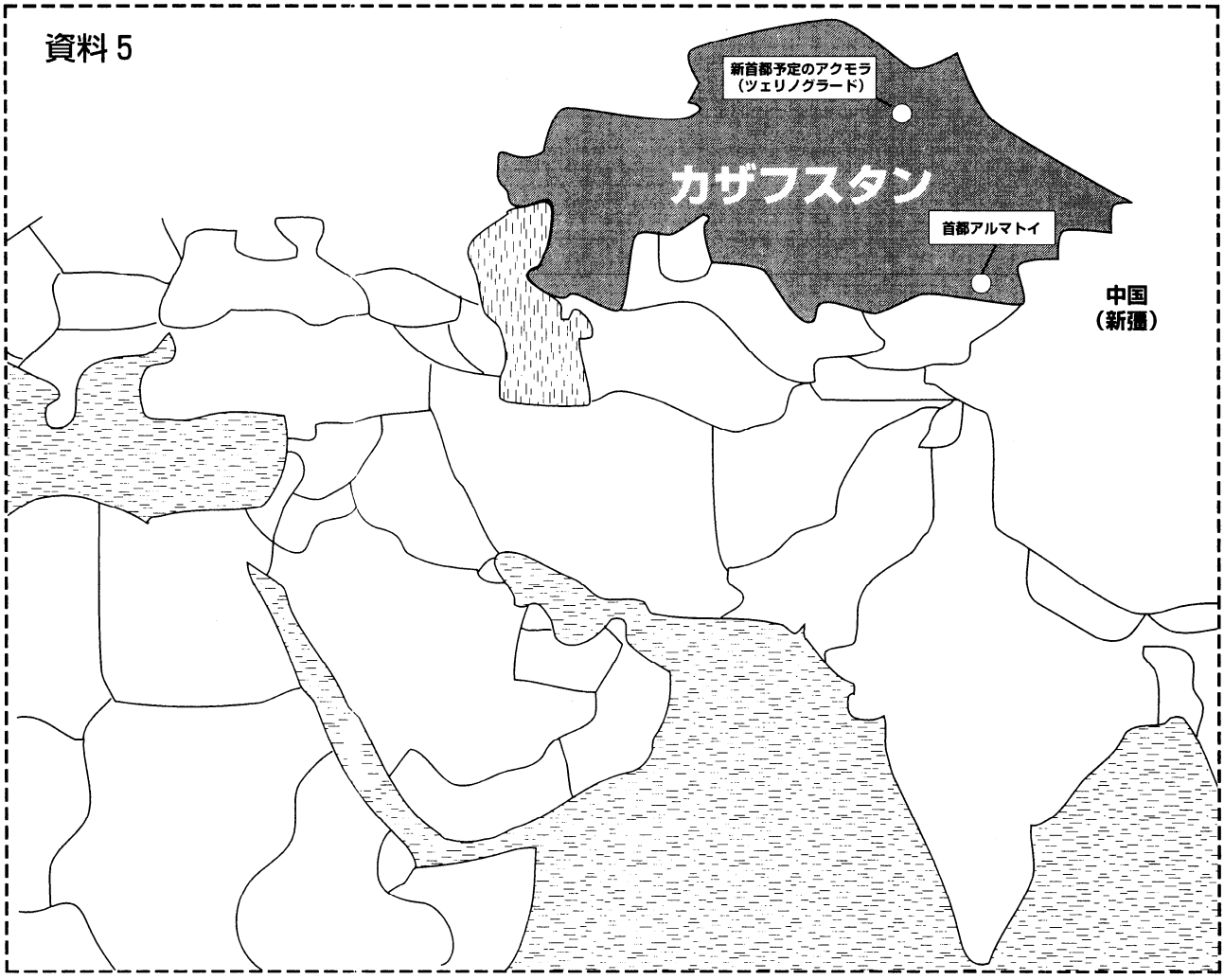
石油・ガスだけでなく他の天然資源も大変豊かで、カザフの鉱山資源がなければ旧ソ連の経済は機能しないという評価がありました。それほど大きな意味をもつ天然資源です。

それからもう１つ天然資源ではありませんが、カザフスタンにとって重要なものとしてバイコヌールに宇宙基地があります。この意味はひじょうに大きいものがあります。現在はロシアにリースの形で使わせていますが、この戦略的価値も大きいわけです。

3. 広大な領土

それから広大な領土があります。イギリス、フランス、ドイツ、オランダなどすべて合わせた大きさ、つまり西欧の領土と同じくらいの大きさがあり、東アジア、南アジア、スラブ世界、中東をつなぐ中心的位置にあるわけです。

資料５



4. CIS政治（中央アジア政治）における重み

次にCIS政治における重みについて解説します。ソ連が崩壊しCISが誕生した際にカザフスタンが果たした役割がひじょうに大きかったわけですが、その後もロシアをどこかの国が牽制することができるとすれば、それはウクライナないしはカザフスタンであろうという評価はいまだに可能だと思います。ウズベキスタンもそれなりの力がありますが、ロシアに影響を与えることができる国、それなりのイニシアティブを発揮できる国はカザフスタンかウクライナであり、これが暗に提携した場合はロシアに影響を与えることができる重みのある国です。ただ私の印象では、最近その力に翳りが出ているようにも思えます。

次にスラブとイスラムおよびアジアとの橋についての役割ですが、これは領土的にも人口的にも文化的にもいろいろな意味で『橋』であるということです。

5. サンドイッチ－ロシアと中国、ロシアとイスラム

次にサンドイッチという部分です。中国の新疆とカザフスタンは接しております（**資料5・地図**）。他に中国と接している国としては、キルギスタンとタジキスタンがあります。ただタジキスタンは中国との間に5000メートル級の山があり、道路が通じておりませんので実質的にカザフスタンとキルギスタンの2つが中国に接しているということになります。地図ではカザフスタンが中国の北西にあります。そこから55キロだけロシアと中国の国境があります。そこからモンゴルが続いております。これはソ連が崩壊したことによる大きな地理的な変化の1つです。その意味でこのカザフスタンは、ロシアの対中国安全保障に関してきわめて重要な位置にあります。中国とロシアの関係がよければカザフスタンは安定していられますが、関係が悪くなるとここも不安定になります。いずれ中国とロシアが衝突するのではないか、もしくは緊張が高まるのではないかということになると、ロシアはカザフスタンに大きな影響力をもとうとします。その現れが最近出てきております。それがロシアとカザフスタンの間の経済同盟であり、中国とカザフスタンとの国境はロシア軍が守るということがはっきりと条約の形で出てきています。

現在、ロシアと中国の関係はどちらかというとよい方向に進んでいるといえます。これから先はわかりませんが、少なくとも悪い方向には行っていません。ただロシアがカザフスタンとキルギスタンに、より大きな影響力をもち始めていることはたしかだと思います。この辺の経緯についても副大統領にお話をお伺いしたいと思います。

それと同時にロシアの西側にポーランドと接するベラルーシがあります。また、ベラルーシとカザフスタンがロシアと経済同盟を結びました。いろいろな意味でこの3つの国は緊密な関係になります。違う言い方をしますと、ロシアの影響力はベラルーシにまたカザフスタンにだんだん強くなっていくことは明らかだと思います。ただ問題はおそらくベラルーシはロシアとの関係をどんどん強めていくと思いますが、同じ枠組みであっても、ロシアとカザフスタンとの間はここのペースほど早くならないだろうと思います。いろいろな条件がありますが、カザフスタンはどのような関係をロシアともとうとしているのか、その辺も副大統領にお聞きしたいと思います。

それからロシアとイスラムの関係です。イランと隣接して、カザフの南にタジキスタンとアフガニスタンがあります。ここはカザフスタンの真ん中をスラブの世界が貫いており、カザフスタンの下側を中東の非アラブの北側の世界が貫いているという事情があります。

6. タジキスタン紛争

そこで問題なのは、いまタジキスタンで起きて

いる紛争が収まるのかどうかということです。現在のところ、タジキスタンに最も影響力をもっているのはロシアです。いまタジキスタンの国外に出て反対運動を続けているのはイスラム色の濃い連中で、イスラム色が薄くロシアと提携を組んでいるのがいまのタジキスタンの政府です。タジキスタンにゴルノバダフシャンという中国と接する州がありますが、ここに反対派の連中が根城を築いていました。ここはたしかにタジキスタンですが、紙の上でタジキスタンの領土であるだけで、国際政治の力学では誰のものでもないようなところです。95年の春頃に、ロシアとタジキスタンのかなり強硬な路線を目指すものがそこを包囲して反対派を追い出そうとして、大きな紛争が起こってしまいました。多くの専門家はこれは手をつけない方がいいと言っていましたが、強行してしまいました。

その頃から中央アジアの中で、タジキスタン情勢を見る目が少しずつ変わってきたように思います。つまりそのように強硬な路線を続けたのでは、中央アジアは南からのじわじわとした侵略を受けてしまう。ソ連にとってアフガニスタンが致命的な傷になったように、ポストソ連の中央アジアにとっても、このタジキスタンの問題は致命的な傷になるかもしれないという危惧をもち、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタン、それぞれが少しずつ積極的に前に出てこの紛争を収めようと動き始めています。そこで副大統領にお聞きしたいのは、このタジキスタンの問題についてどのような解決方法をお持ちなのでしょうか。日本を含む国際社会にどのような貢献をお望みなのかをお伺いできればと思います。

7. 国の重心の変化とウズベキスタン

現在のカザフスタンは、西洋全体を合わせたくらい大きな国です。東にはにテンシャン（天山）山脈があり、南にはパミール高原があります。首都はかなり国の南東のはじにあり、中国に近いということも問題ですし、かなりシベリアから遠いところにあるということも問題です。国の首都はできれば真ん中にあった方がコントロールが効きやすいということもあります。そこで昨年、首都を、ここから2000キロ北西に位置するアクモラに移すことに決定しました。また逆転してアルマトイに留まるということもあるかもしれませんが、ほぼいまの流れでいけば首都移転だろうと思います。このことは中央アジア政治のみならず、大きな地理的範囲で意味をもちそうです。つまり首都がこの中央アジアの地点から、シベリアの南側に移ってしまうということです。そのステップによってカザフスタン全体の比重が上にあがります。そうなれば、カザフスタンの一部の南側だけが中央アジアに属するということになりかねません。

このことの意味の1つに、ロシアとの関係があります。北カザフスタンに住んでいるロシア人にとってみると「事実上ここはロシアのものであり、カザフ人は手を出さないと思っていたからおとなしくしていたのに、カザフ人がここに首都を移して全部カザフスタンにするならばそれは許さない」という熱狂的なロシア主義者もいます。そのように首都が北上することの意味は何なのか。ロシアとの関係はどうなるのかということです。

また、アルマトイからアクモラに移った後の中央アジアの力学はどうなるのでしょうか。これだけ重みのあるカザフスタンが事実上、上にあがり、大半は中央アジアではないという方向に動いてくると、他のどこかが強くなります。それはおそらくウズベキスタンだと思います。ウズベクの力がますます強くなり、その中で大きな変化が起こってくると思います。このような首都移転の可能性とその目的は何か。マフィア対策や公害問題などと言われていますが、実は何を得ようとしているのか。その後の中央アジアの政治にどんな影響があるのかも副大統領にお伺いしたいと思います。

8. カスピ海開発問題とパイプラインルート

次にカスピ海の開発問題とパイプラインルートの問題です。これは内海であるかOPEN SEAであるかという問題があります。現在カザフスタンとアゼルバイジャンはこれはOPEN SEAであり、カスピ海の棚の天然資源は沿岸国が自由に開発してよいという立場をとっています。それに対してロシアは去年の秋頃からはっきりとここは内海である。したがってここの開発は共同で行うことが前提である。すなわち「勝手にやるな。勝手に西側と通じてパイプラインで運ぶな。」と言っています。その中で揺れていたのがイランです。イランは揺れた末にアメリカに原発問題などで相当やられたこともあり、最終的にいまこの立場でロシアを支持しています。ここは内海だから、アゼルバイジャンやカザフスタンが勝手に資源を掘り出すことには反対で、我々の意見を聞いてほしい。つまりそれをブロックする権利があるというロシアと同様の立場をとっています。

先日クリントン大統領がロシアを訪れた時に、イランに対してロシアが原子炉を提供するのはけしからんと主張しましたが、エリツィンはそれを拒絶しました。その時のイランの喜び方はすごいものがありました。さすがはロシアだという大きな評価をしました。その同時期にカスピ海は内海であると意見を変えました。したがってカザフスタンがカスピ海の資源を開発するに当たっては、少し困難の度合いが強まってきています。これをどのように考えておられるのか、副大統領にお聞きしたいと思います。パイプラインルートについてはすでにお話ししましたように、北側つまりロシアを通っていくルートA、これはロシアが旧ソ連にある天然資源をパイプラインの形ですべて押さえたいという意図があるわけですが、これでいくのか。それとも基本的にはルートAで運び切れない分はロシアを経由せずにトルコに流すことも可であるという姿勢を最近カザフスタンは示していますが、それは実際どうなのか。ロシア向けに大きく言ってはいないが、これを実現したいとお考えなのか。それとも、ロシア経由のパイプラインの能力を高めてあくまでロシア依存でいくのか。ロシアとの経済同盟と合わせて、どの程度ロシアと経済安全保障を含めた運命をともにしようとしているのかをお伺いしたいと思います。

9. 今後の民主主義のあり方と経済発展モデル

最後に、民主主義のあり方についてです。いま中央アジア全体に1つの傾向があります。かつてのロシアに最も近い線、市場経済にできるだけ早く入り込もう、民主主義を制限せずに発達させていこうという路線をカザフスタンとキルギスタンがとっておりましたが、トルクメニスタンやウズベキスタンはどちらかというと強権的で、ある意味で東アジア的なモデルを使ってきました。私はウズベキスタンのカリーモフ的なモデルがうまくいくのか、それともカザフスタンのナザルバーエフ大統領的なモデルがうまくいくのか、この中央アジアの土壌でどちらが合うのか興味をもっておりました。しかしここ最近ひじょうに大きな変化が出ております。カザフスタンもそうですが、全体的に強権路線に近づいてきているように思います。これはいったいどういう理由なのか。それはうまくいくのか。失礼な言い方になるかもしれませんが、はたしてナザルバーエフのような最初から民主主義者で売った人間が、突然握りこぶしを振り上げて人を恐怖させる力があるのか。一度笑った人間が怒った顔をしても効き目があるのか。それとも普段笑っているからこそ、突如節々に怒った方が効き目があるのか。なぜそういう形に移ってきているのか。

それからいま議会との関係がひじょうに緊張しております。それどころかいまカザフ議会は存在しなくなりました。ロシアとの公式な関係を結んだ段階で、ベラルーシの議会が事実上機能しなく

なりました。それから一時的だとは思いますが、カザフスタンの議会も機能しなくなりました。あたかも立法府が必要ないかのような現状が出ています。これは偶然の一致だと思いますが、これからカザフスタンの民主主義はどちらへいくのか興味のあるところです。私はこういう政治に移った時に、1人の人物を思い出しました。それはトルコの近代化の父であるケマル・パシャです。彼はオスマントルコの後に新しい近代的なトルコを作る際に、民主主義と強権とをうまく組み合わせながら、変節したと言われることを何度か繰り返しながらいまのトルコを築いてきました。もちろんいまのトルコも岐路にさしかかっていますが、そのような手法は政治学者の間で高く評価されています。私はナザルバーエフ大統領がそういう意味で少し強権に移った時に、変身というよりそういう時期が来たのだなと解釈しましたが、それでよろしいでしょうか。副大統領のご意見をお聞きしたいと思います。

また経済発展モデルについてもこのあたりで1つの方向性が見えてきているのかどうか、お聞きしたいと思います。

10. 東アジアそして日本との関わり

最後に、日本のある東アジアとどのような関係を結ぶのかということです。実現されるかどうかはわかりませんが、ガスや石油がパイプラインによってこちらに来るという案が計画されているということ。また、日本とヨーロッパを最短ルートで結ぶ場所にあり、鉄道も入っているということ。そういう意味で日本にとって重要なところです。それからある意味でロシアの影響力、またイスラムの影響力が、世界にとって必ずしもわれわれの望む方向に動いていくかどうかわからない面もあります。その際に、真ん中に位置するカザフスタンがしっかりとした市場経済の道、民主主義を確立した場合にひじょうに大きな貢献を成すと思います。それだけでも日本はカザフスタンを支援する意味があると思いますが、そのようなお考えを副大統領はおもちでしょうか。また具体的にもっと日本がどういうことをすべきなのか、ご意見をお聞かせいただければと思います。

第二部　アサンバイエフ副大統領の講演

はじめに

ご列席のみなさま、まず第一に秋野助教授に対して心から感謝します。ひじょうに幅広い形でカザフスタンを紹介して下さいましたおかげで、私の講演が楽になりました。さて私の講演ですが、笹川平和財団に対する感謝の表明から始めたいと思います。この財団の崇高な目的を知ることができ、由緒ある日本の文化・伝統にも親しむことができました。また、日本の経済・文化の分野におけるカザフスタンとの協力の可能性についても知ることができました。そのおかげでまた今日みなさまとお会いできたわけです。私は専門は経済です。カザフスタンを紹介するに当たって、政治的な面だけではなく経済的な面でもお話ししたいと思います。

日本の財界とカザフスタン

私たちにとって大変うれしいことですが、最近日本の財界の方々がカザフスタンについて大変大きな関心をいだいて下さっています。日本がカザフスタンに対して特典的な融資をして下さっておりますし、さらにはIMFあるいは世界銀行とともにカザフスタンに対して協調融資をして下さっています。また、パリクラブと協調してさらにリスケを1億5000万約束して下さっています。さらに日本はいくつもの優先的プロジェクト、これが互恵的なものであるならば協力する用意があると表明しています。これに関しては国際的なOECFを通して両国間の各プロジェクトの検討に入っています。日本の通産省はカザフスタンに対して、3億ドルの貿易保険を提供してくれると言っておりますし、そのおかげで約6～7億ドルの融資を受けることができるようになります。

カザフスタンの各地域の油田の探査・開発についても協力が進んでおりまして、たとえばハラル北部地域の油田探査などがそうです。日本の多くの大手の企業が事務所をカザフスタンに開いておりまして、カザフスタン・日本経済協力委員会などの参加でさまざまな協力が進んでおります。現在、伊藤忠による12のプロジェクトが進んでおります。その他、三菱の場合は7プロジェクト、ニチメンは9プロジェクト、丸紅が5プロジェクト進めています。このようなプロジェクトを合計すると総額数十億ドルになると思います。

カザフスタンへの投資の可能性？

次にカザフスタンについて若干申し述べたいと思います。領土は地球上の陸地の2パーセント、人口は地球上の人口の0.3パーセントを占めています。世界には1113の国があるといわれますが、人口としては85位です。地下資源では世界でも有数の国です。タングステンと鉛は世界1位、亜鉛は2位、銅・マンガンが3位、金は6位、鉄鉱石が7位、石油が9位、天然ガス・石炭が10位です。現在わが国では、地下資源の埋蔵地が760あります。金の埋蔵地が216、銅が83、スズが64、タングステンが21、チタンが18、ボーキサイトが23、スズが58、ウランが44、石油・ガスについては190の油田・ガス田がありますが、すでに開発されています。現在20億トンの石油・ガスが2兆立米、ガスコンデンサートが5億9500万トン、採掘可能です。ですからぜひとも日本の財界の方はこれらを念頭に置いていただきたいと思います。これだけの規模を念頭に置いていただければ、カザフスタンとどんなビジネスができるか十分に考えられるでしょう。

それからレアメタル、あるいはキド類、非鉄金属などの埋蔵資源があります。これは地表近くの地層にあり、これらを回収すれば多くの富を得ることができます。ソ連時代は産業別省庁というのがありまして、銅の開発は銅開発局で行っており、各部局ごとに企業が傘下に入りました。中央集権的に管理されていたわけです。バルハッシの銅の

開発はこの部局に属しました。銅の部局で管理されているところではポリメタルが採れたとしても、ポリメタルは別の部局に属しており、あまりにも縦割りだったためにそれには一切ふれませんでした。きわめて豊かな資源が、誰の手に触れることなく地表に放置されているわけです。そのためきわめて容易に採掘できるようになっています。カザフスタンには大手の企業だけでなく、ぜひ中小企業もカザフスタンにいらして下さい。もちろん大手の企業には長所も短所もあります。大手の企業はやはり動きが鈍く、運転資金の回転の仕方もひじょうに鈍いわけです。よりいきいきと迅速に決定を採択し、資金の回転もひじょうに早い中小企業にぜひ来ていただきたい。そういう政策をすでに私たちはとっており、世界に対して宣伝を行っています。昨年12月、世界の200の企業を相手にカザフスタンに関するプレゼンテーションを行い、カザフスタンに対する投資の可能性について述べました。これは大手の企業だけでなく、多くの中小企業も招待しました。招待状はアメリカだけでなく世界中に送り、カザフスタンに興味のある企業を招待いたしました。

次に政治的な安定の問題です。これについては後に詳細にふれ、秋野先生の質問にお答えします。しかしはっきり言えることは、旧ソ連地域の中でカザフスタンは最も安定しているということです。ですから実業家の方々は政治的不安定という点でカザフスタンには心配はいらないと思います。

さらに私たちは新しい外国投資法というものを採択いたしました。これは外国の企業の鑑定をすでに受けていまして、外国の法律家によっても大きな評価を受けています。つまり投資環境が大変よろしいという評価が出ています。たとえばこの法律によると、外国側が望むならばその利益を新たに再投資することもできますし、外国に送金することもできます。100パーセント外資企業を設立することもできますし、カザフスタンとの合弁も可能です。また税法ですが、契約条件は前のまま保たれることになっています。つまり、税法が変わっても以前に契約したものはその条件が守られるということです。

中央アジアにおける政策と役割

さて秋野先生のご質問にお答えしましょう。これはカザフスタンの中央アジアにおける政策と役割というものです。カザフスタンは中央アジアにおける指導的な位置を占めております。ですからカザフスタンを1つの国としてとらえており、中央アジアに属するのかシベリアに属するのかという判断はしておりません。私たちの祖先は数世紀にわたって1つの国として管理してきましたし、いまもそうです。ですからソルジェニッツィンというロシアの作家のようにこの部分は南、上の部分はシベリアであるというような言い方は不満です。やはりショービニスティックな見方であると思います。

カザフスタンは旧ソ連においてGNPでロシア、ウクライナに次いで3位を占めておりました。領土的には旧ソ連において2番目の地位を占めておりましたが、現在は世界で9位の国です。このように、カザフスタンは中央アジアで指導的な大きな役割を演じております。といいますのは秋野先生もおっしゃったように、中央アジアの他の諸国はロシアとの接触をカザフスタンの領土を経て行うという地理的位置にあります。現在カザフスタンは独立し、今後も独立国家として発展していくわけですが、カザフスタンの大統領はユーラシア同盟を作ろうという呼びかけを行いました。この同盟はかつてのソ連邦とは違います。これは一種のゆるやかな連邦、つまり連合体、コンフェデレーションです。ですから旧ソ連諸国でユーラシア同盟に入りたいものは誰でも入れる。しかしいかなる国もその中で支配的な地位を占めない。その

国の経済力や軍事力にかかわらず、同等に1票の評決権を持つというものです。カザフスタンであれウクライナであれロシアであれ、政策を採択する際にはみな平等の1票を持つということです。たとえばロシアが60パーセント、その他の国が40パーセントの評決権しか持たないというのではだめだということです。そういう呼びかけでした。

ロシアとの関係

ロシアとの関係ですが、大変正常な関係として発展しています。この両国は大変相互依存的です。ですからお互いゆずり合うことも多いのです。アインシュタインはこんなことを言いました。大変皮肉なことですが、それは原子爆弾の開発によって各国はお互い善良になり、大きな戦争が起こらなくなるだろうと言いました。ロシアは私たちが依存する相手でもあり、またロシアも私たちに依存しております。といいますのは、ロシアは私たちにとって大きな市場ですし、ロシアで消費されているクロムや鉄鉱石、鉛、亜鉛はすべてカザフ産です。銅に関しては現在も将来も、ロシアで消費される大多数がカザフ産です。つまりロシアで消費される鉱山資源はほとんどがカザフ産であり、ロシアは大きくカザフスタンに依存しております。モリブデンもカザフスタンとアルメニアとウズベクで採れますが、ニオブのコンセンデラートの90パーセントがカザフスタンで生産されております。タンタラもそうです。イットリウムも同様で、カザフとキルギスが主な生産地です。レニウムもカザフのみで採れます。つまり一方的にロシアに依存しているわけではなく、ロシアも他の旧ソ連諸国に依存しているのです。このように私たちの相互関係は、客観的に見ても良好なものになるべきです。個々の問題については紛争的な事項が起こりますが、現実そのものが紛争事項も解決できるものだと思います。それは石油パイプラインの問題も含めてです。

遷都問題

さて、カザフスタンの首都を移すという問題ですが、これについて地理的に見ることはできないと思います。一部の国は3度も4度も遷都するということがありました。ある地理的地域から、別な地理的な地域に移動するということですが、遷都ということになると地理的なファクターだけを見るというわけにはいきません。以前は巨大な国の南東の端に首都がありましたが、実際のものごとはすべてモスクワで決められていたという時には、アルマトイがどこにあったかということに重要な意味はなかったわけです。しかし現在、カザフスタンのすべての地域から南東の端にやって来なくてはならないという事態になりました。そうなると地理的位置というのは大きな問題です。だからこそ私たちはアクモラに遷都しようと思うわけです。アクモラというところはカザフスタンの地理的中心に近く、この地点で多くの鉄道の路線が東西南北に走っているからです。またアクモラは、パブガダール、カラガンダ、ジェスガスカンなど経済的に発展している地域に隣接しています。さらにはアクモラを経由してシベリア横断自動車幹線が通っています。これはロシア、シベリアとつながる道路です。ですから首都を移すということは、大変大きな政治的・経済的な意味をもつのです。

大学はカザフスタンに55ありますが、そのうちの20がアルマトイにあるという問題があります。つまり文化的な生活、国の最も優れた人達はアルマトイに住んでいるわけです。ここはきわめて学術的な文化的なセンターなのです。遷都するということは、共和国の中央もそういった文化的・学術的なセンターにならなくてはなりません。必ずしもいまアルマトイにいる人が移るということではなく、若い、より近代的な教育を受けた人が集まるというようにしてもいいと思います。つまりこの北部において科学技術革新を目指し、ハイテ

ク分野、学術集約的な工業を発展させたいと思います。カザフスタンの首都付近では公害、エコロジーを害するような企業ができてしまっておりますが、北部においてはハイテクでクリーンな部門を発展させたいと思っています。たとえばクリーンエコロジカルなバッテリー生産工場を作りたいというプロジェクトが進んでおります。

このように、遷都はさまざまなファクターに基づいて行うわけです。たとえば住居や生産施設をアクモラで建設しなければいけないわけです。これはだいたい今年の末から始まると思いますが、政府がそちらに移ることによって経済が活性化すると思います。それがさまざまな産業部門に波及するからです。また各国の企業が、アクモラのさまざまな行政的な施設の建設を請け負ってくれると約束しています。ですからカザフスタンの中央部に遷都するということは、中央アジアの代わりにシベリアを選んだということではありません。そういう考え方はあまりにも形式的だと思います。いま言いましたファクターが主な遷都の理由です。

ナザルバーエフ大統領の政治姿勢

次に政治的なモデルの問題、ナザルバーエフ大統領の立場の問題です。現在の新しい憲法の中でカザフは民主的な法治国家になると言っておりまして、この枠をはずれることはありません。しかし民主主義というものは単に法律で決まるものではありません。憲法があるからといって民主主義が実現するわけではなく、民主主義を実現するのは大変長い道のりが必要です。民主主義的な法治的な国家というのは、さまざまな国家の側面、さまざまなレベル、さまざまなメンタリティー、国民の意識、こういったものの中でいろいろな意味あいをもつと思います。しかし間違いなく民主主義はわが国で発展していくと思います。つまり最も普通の世俗的な（宗教的ではないという意味で）民主主義的な法治国家を作るという意味です。イスラム原理主義の影響を言われますが、わが国の国民はあまり宗教的でありません。カザフ国民全体の宗教としてイスラムは確定しておりません。アラブの予言者からはかなり遠いところに位置しておりましたし、気候的にも回教にはあまり合わなかったという面があったかもしれません。

これは政治制度、わが国が目指す国の体制モデルの話ですが、現在はあくまでも移行期にあります。この移行期においてはやはり国家権力がかなり強力であるべきだと思います。最終目的としては、民主的で法治的な共和国国家、すなわち民主的な制度をもった大統領制の国を目指しております。大統領は最高の権力機関になります。つまり各権力、三権の上に立ってそれを調整する機関になるわけです。現在の憲法に基づくと、大統領は行政権の長でもあります。6月30日に議会を解散したわけですが、新しい憲法案において8月に国民投票を行い、議会のあり方を決めたいと思っています。

旧社会主義圏において2つの発展モデルがあります。1つはバルト諸国と東欧諸国のモデルです。社会主義になる前に、すでに市場経済を経験している国です。つまり資本主義社会というものをすでに経験していて、民間企業の経験をもっていた国です。もう1つは市場経済を経験していない国々、特に中央アジアの諸国がそうですが、こういった国は封建的な制度の中から社会主義に移っていった国です。東欧・バルトの場合は市場経済化への動きがひじょうに自然な流れとして動いています。というのは国民が市場経済をよく知っているからです。しかし旧ソ連の大多数の地域はそうではない国民が占めているわけです。民主主義的であろうと、非民主主義的であろうとやはり市場経済を強権的な方法で導入せざるを得ない面があります。私的資本や企業経営、起業家精神などについて自然にまかせていたら世界に遠く遅れて

しまうからです。かつて鉄のカーテンによって私たちが国を閉ざしてしまったことは大きな誤りで、私たちなしでも世界は発展していったという事態が過去にあり、これを繰り返したくはありません。

石油パイプラインルート

石油パイプラインについてですが、石油パイプラインの最も適切な方法として西側の専門家をお招きしまして、9つのオプションを開発しました。その中で最も適切なオプションがノボロシンスクからボスフォラス海峡を経て、ヨーロッパにつなげるという形でした。しかしこの場合気になるのは、トルコが指令的な立場をとろうとしていることです。たとえばノボロシンスクのターミナルからイスタンブールを通過するということになると、環境にかなり影響するからというようなことを言ってトルコ側がタンカーの数を制限したりします。そういうことを考えますと、9つめのオプションがいいわけですが、この場合、コンソウシアムというものが作られるはずです。しかしこれだけでは石油の輸送の問題をすべて解決できません。このパイプラインのキャパシティだけでは足りないのです。全部で6000万トンしかキャパシティがないわけですが、もっと輸送しなければいけない石油があるのです。ですから平行していくつかのオプションが検討され、逐次それを実現していかねばなりません。たとえばトルコ経由のパイプラインということも考えられます。これについて、石油ガス省とトルコの官庁との間でかなり詳細な検討が行われております。たとえば中国経由の東向けのパイプラインということも考えております。あるいは黄河まで運び、黄河からタンカーでさらに東南アジアに運ぶというルートも考えています。ですからいくつもパイプラインが必要だというのは、石油が将来的に大変多くの量になるということと、もう1つはロシアがロシア領土を通過するパイプラインについてひじょうに独占的な立場をとっているため、複数のルートを作ることによってそのような独占的な立場をゆるがす必要があるのです。しかしロシアとは友好的な関係があるので、交渉の中でこのような問題は解決できると思っています。

対中国関係

中国との関係ですが、大変良好です。中国、ロシア、アメリカ、イギリス、この4つの国家がすでに協定を締結しておりまして、カザフの領土保全について保障してくれております。中国側のこの立場については大変感謝しております。中国との国境線は1500キロメートルと長く、通商関係も現在良好に発展しております。ですから中国とは友好的な政治的な関係を保つこと、また経済的な交流を発展させることが私たちにとってきわめて重要なことで、これは北の隣国とも、東の隣国とも、南の隣国ともそうしていきたいという立場です。

鉄道路線計画

鉄道路線についてはわが国の鉄道省、鉄道大臣、また各国の鉄道関係の官庁と大陸横断鉄道の建設について交渉が進んでおります。これは中国、トルコ等を通過する鉄道です。たとえばドルゾバという鉄道駅は中国との国境線沿いにありますが、これを日本の協力で復興させまして、かつてのシルクロードをよみがえらせるというような夢のあるプロジェクトがあります。この鉄道路線がカザフスタンを通過するのはその長い路線の一部ですが、これが大陸横断鉄道となって多くの国をつなぐことになります。おそらくこのプロジェクトは実現されるでしょう。

タジキスタン紛争

タジキスタンの紛争事項ですが、タジクとアフ

ガンの国境戦にはカザフの部隊が参加しております。ナザルバーエフ大統領はこの問題でタジク政府側とも反体制側とも会談し、「お互いゆずり合うべきだ。平和的な、武力を用いない話し合いで問題を解決すべきだ」という話をしました。そして、個々の野心に基づいて自国民を殺すような結果になることは大きな犯罪だというように説得しました。

独自の市場経済導入モデル

市場経済導入のモデルですが、いかなるモデルも私たちは採用しません。いろいろな国のモデルを参考にして私たち独自のものを作ります。ロシアでも中国でもなく、カザフスタンのモデルというものができるわけです。これが一番ぴったりということです。さまざまな国のモデルの要素を取り入れて、もちろん日本のモデルも取り入れます。日本はいわば2つの反対の要素をうまく結合させました。たとえば市場経済と見合わないような要素、つまり国家による規制という要素をうまく結合させました。こういった日本の経験を私たちは注意深く学んでおります。

そして、笹川平和財団とともにいくつもの研究を行いました。東南アジア地域の各国の経験、日本、台湾、中国などの経験です。この国々のメンタリティーはかなりカザフに似ていると思います。ですからロシアのモデルだけでなく、どちらかというと中国のモデルなども大いに取り入れております。

最後に大変重要なことを申し上げたいと思います。私たちが改革を始めた時、ロシアと同じ通貨システムの中にあったということです。わが国の経済の対外的な関係の70パーセントはロシアが相手でした。ですからロシアが、最初の改革の時期にさまざまな独占の解体を行いましたが、私たちはあの時はロシアと同じ道を歩まざるを得なかったわけです。ところが現在われわれは独自の道を歩み始めました。まさにわが国の現状が必要とする、そういった方法を選びつつあるわけです。ご静聴ありがとうございました。

第三部　質疑応答

質問

ジェトロのエグゼクティブディレクターの近藤です。私は93年の6月に通産省のオーガナイズしたミッションの一員としてカザフスタンに参りました。日本人としてかなり早く訪れた方だと思います。質問を2つさせていただきます。93年6月以降、経済面で一番大きな変化は何だったでしょうか。それから副大統領は経済の専門家と伺いましたが、独自通貨“テンゲ”の発行は成功だったでしょうか。

副大統領

93年以降の大きな変化は、私たちが生産の低下を克服しつつあるということです。かなりの分野で生産の回復が見られ、いくつかの分野では生産の増加というものもかなりの幅で見られております。さらに私たちはこの間にかなりインフラの整備を行ってきました。これは自慢するつもりではなく、私たちの最適な状況に徐々に近づいているということです。また、外国からの投資を呼び込むという政策も状況の好転に貢献しております。私たちはインフレの克服にも成功し、5月には2.7パーセント、94年には年間インフレが10倍のレベルでした。

テンゲの導入については、私たちはひじょうに慎重でした。ロシア政府の指導部の考え方も考慮しつつ1991年末、非公開の協定によってテンゲの準備をしておりました。しかしそれを導入することに関しては、ロシア政府の経済政策やカザフスタンがルーブル圏から離脱するという点も考慮し、半年のインターバルをとりました。マネーサプライが国内で増大するという問題、ロシアの通貨との相互関係なども考えなくてはなりませんでした。ですからロシアが通貨改革を行った時点で私たちはテンゲを導入したわけで、これは必要に迫られた措置でした。その後半年、テンゲはドルに対してもルーブルに対してもかなり安定した地位を保ってきました。ですから私たちとしては国内通貨の導入によって、わが国独自の財政政策をとることができるようになり、それは長所であると考えます。

質問

日商岩井の吉田です。この6月に日本・カザフスタン経済委員会の代表団が訪問した時には大変お世話になりました。また6月2日には、副大統領自ら私たちと会談の時間を設けていただき、感謝申し上げます。質問したいのは、私たちが訪れた時に、去年の12月から民営化を行う過程においてそれを2つの段階に分けて、第一段階は経営権を民間に渡す。第二段階で国営企業の完全な民営化を図るという二段階論を出されました。そしてそれを実行されているわけです。これはひじょうに独特なやり方で、ロシアとも中国とも違います。いまおっしゃったカザフスタン独自の方式だと思いますが、このような結論が出された背景についてお話しいただきたいと思います。

副大統領

わが国における民営化というのは2つの段階ではなく、実は3つの段階というかオプションがありました。第一のオプションは小規模企業の民営化です。これは商業部門、サービス部門の中小企業を売却したという段階です。現在は大規模民営化というものが行われております。これは株式化あるいは脱国有化であり、中規模の企業について行われておりまして、かなり多数の企業が網羅されています。もう1つの民営化はいわゆる個別の民営化というもので、数千の従業員をもつ最大手の国営企業の民営化です。これは個別の民営化プログラムで、各企業ごとに作られております。この民営化には外国の企業も参加できるようになっ

ております。この個別の民営化については企業の構造改革や脱国有化について、外国の企業が参加する場合には入札という方法をとっています。いくつもの民営化の方法が世界各地にありますが、私たちがまず取り入れたのは日本的なモデルです。日本経済研究所が出した研究論文の中で戦後の民営化、国鉄とNTTの民営化に関するものがあり、それを読みました。それから日本の経験がチェコ・スロバキアでどのように適用されているかという論文も読みました。こういったものを参考にして私たちの民営化の方法を作ったわけです。ですからたしかにユニークですが、大いに日本の経験を学んだということも言えます。

新しい憲法の中には、土地に対する私的所有という要素も盛り込んでおります。現時点で生産部門の施設がある土地に対する私的所有を認めています。つまり、生産施設は売却できるわけです。売却して、新しい土地に移って建物を建てることもできるようになるわけです。ですからみなさまもカザフの土地を購入して、そこに企業を建設することができるようになるわけです。

質問

私は本野といいまして、元外交官であり、現在野村証券の顧問をしております。お伺いしたいのは、イランとイラクという2つの国の存在は、アメリカが最近法的な秩序というものに対して、一方的な制裁措置をもって対外政策を処理しようという傾向があり、その結果日本も影響を受けていますが、イラン、イラクがその結果として接近をするのではないかという見方もあります。このような状況になれば国際政治に大きな影響があると思いますが、それに対するカザフスタンの考え方をお伺いしたいと思います。

秋野

いまの質問につけ加えます。カスピ海は内海か否かについてのイランの立場にも関わる問題ですが、それも合わせてお答えいただければと思います。

副大統領

イランとは正常な関係を保っております。急速に発展しているとは申しませんが、両方とも国連のメンバーですし、互いに対立する理由は何もありません。このような条件の下で、両国間には正常な関係が作られています。ただカザフスタンには客観的にイスラム原理主義発展のための土壌はありません。なぜなら狂信的な宗教活動家はカザフスタンにはいないからです。イランとカザフスタンはそういう意味で宗教的に特別な関係があるとは言えません。イランとカザフスタンの経済的な利害関係というものは一致しております。これはパイプラインの関係です。パイプラインをカザフスタンからトルコを経由して出す場合に、一部はイランを経由することになります。そうするとそれは利益があると考えています。一部の石油はイランの北部を通って出されますが、そこで精製されてイラン北部の供給を満たすことになります。それに対して同じ数量の石油を、ペルシャ湾から積み出して他の国に売るという中継の関係になります。このような石油輸送の問題はカザフスタンにとってひじょうに大きな問題ですので、いろいろなバリエーションを見つけて、カザフスタンの石油を世界市場に積み出そうということで努力しています。

それから2つめのカスピ海におけるイランとの関係ですが、議論の基本的な部分はカスピ海のステータスが内海である、つまり湖に近いものであるか、それとも公海であるかということです。旧ソ連の国の中でロシアをのぞいてカスピ海に面している国は、これは海であると考えています。ですから2つの国の間の線でその海を切る、公海条約に相当するものが適用されると考えています。

イランはこのようなカスピ海での権限の分割について態度を変えたというわけですが、これには1つの原因があると思います。これはエネルギー分野、すなわち原子力設備の問題でロシアとイランとの間に行われた取引です。1931年にソ連とイランとの間で、カスピ海南部での領土分割に関する協定が結ばれました。これは公海条約に立脚したものです。ところが現在イランはカスピ海は共同で使う海域であると述べ始めたわけです。現在ロシアはカスピ海に大きな海軍船団をもっています。またロシアは、カスピ海大陸棚の石油に対してもコントロールしたいという欲求をいだいています。しかしカザフスタンはカスピ海は海であり、湖ではないのだという立場に立っています。ですから以前のイランとソ連の協定のように、ここでは公海条約が適用されなければならないと考えています。

しかしいま私たちはできるだけ歩み寄ろうと努力し、いろいろなシンポジウムや実務レベルでの交流や学術交流も行っており、徐々にどこか互いに満足できる地点に到達できるのではないかと思っています。

質問

青山学院大学の袴田です。1968年以来何回かカザフスタンを訪れておりまして、日本人では早い方かと思います。最近ナザルバーエフ大統領がされた、カザフ内の諸民族大会議に向けての演説の全文を注意深く読みました。前半ではカザフが歴史的にソ連によっていかに大きな犠牲を払わされたかについてと独立の重要性を指摘しておりますし、後半ではインテグレーションの重要性、あるいはユーラシア同盟の重要性についてふれられています。お聞きしたいのは、これまですでにふれられているロシアとの関係ですが、私の知り合いのカザフに住んでいるロシア人がこんなことを言っておりました。カザフではロシア人に対する弾圧はなく、関係はうまくいっている。しかし不安はある。不安というのは政府のポストなどが空くとそこを優先的にカザフ人が占めてしまうという状況があり、ロシア人にとっては弾圧ではないけれども、民族化のプロセスが不安であると。子供達の将来を考えるとロシアに移住せざるを得ないというロシア人がいます。ロシア人のロシアへの移住はいまどういう状況なのでしょうか。昨年キルギスタンの大統領と個人的に話しましたところ、アカーエフ氏もカザフスタンにとっていま頭の痛い問題は、経済・科学技術の面で重要な位置を占めているロシア人がキルギスタンから出ていることであり、それは私たちにとってむしろマイナスなんだと、それを引き止めるのに一生懸命なんだと言っておりました。カザフスタンのその状況についてお話しいただきたい。

もう1つは、あるカザフ人が私にこういうことを言いました。日本を含めて西側諸国のカザフスタンの投資は私たちが当初期待したよりもはるかに少なかった。先ほどのご説明でも3000ほどの合弁企業ができたということですが、カザフスタンの人々はもっと積極的な投資を期待していたと。西側の人々はカザフスタンは結局ロシアの一部、あるいはそれに近い立場になるのではないかということで警戒しているのではないか。その結果、私たちはロシアとの関係を深めざるを得ないのだと。これは西側が消極的な結果であるというようなことを言いました。これはどう解釈したらいいのか、ご意見を伺いたいと思います。

副大統領

まず第一に、カザフがいかにロシアから被った被害が大きかったかということよりも、ソビエト制度、共産主義体制といったものがいかにカザフに多くの被害をもたらしたかということです。ロシアではなくて制度そのものがです。ロシアがある時こういうことをやった、やらなかったという

問題ではなくて、やはり体制・制度がどんな被害をもたらしたかということなのです。

ロシア人の移出の問題ですが、アカーエフ大統領同様、ロシア人が去っていくのは大変深刻な問題です。ロシア人は技術者でもありますし、大変優秀な労働者でもあります。また工業地域における雇用者は大部分がロシア人です。これは大変深刻な問題です。これらの人々がいなくなりますと、新しい人がそこに雇用されなければいけないわけですが、そのためには多くの時間がかかります。教育が必要だからです。ですから、カザフの政策としてロシア人を追い出しているというのはまちがいです。ロシア人の移出の原因は、国の公用語としてカザフ語が指定されたということです。ロシア語はあくまでも各国間の交流のための言葉、旧ソ連諸国間のコミュニケーションのための言葉ということになっています。

そして政府のポストがあくとカザフ人が就任するということで、子供達の将来を心配して移動するということですけれども、やはりこれにはカザフ語が公用語であるということが大きな原因になっております。ですから将来的には、ロシア語がカザフ語とともにマスコミも含めて、あるいは政府の要職への就去の問題も含めて、いままで大きな役割を占めていたけれども今後もだいじょうぶだというように保証されないと解決できないでしょう。

それからもう1つ、国に戻るロシア人の中で親類縁者が本国にいる人はいいのですが、そうでない人はやはり簡単にはいきません。ロシアに住むロシア人と、カザフに長く住んでいるロシア人のメンタリティはずいぶん違います。多くの人達がカザフからロシアに移出して、また戻ってくるということが起こっています。この問題は旧ソ連圏全体で起こっていますが、戻ってきたロシア人に対して元々いたロシア人がひじょうに敵対的に接触するということがあるようです。それでロシアの現地の人達とうまくいかず、結局戻ることになるのです。どうしても最初の薄焼きはだまになるといいますか、やはり1つの経験を積んで賢くなるということがあると思います。しかしいまのところ、ロシア人が転出するという傾向は減ってきております。

さきほど言いましたように6月30日にカザフ諸民族の大会議が開かれます。ここでやはりカザフ語とロシア語の両方を使っていくという問題も討議されると思います。カザフ語を公用語としていくことは今後もやっていきたいのですが、現在国民の大部分がロシア語を使っています。ですからロシア語を使うということがまた出てくると思います。ただし、カザフ語がいままであまりにもしいたげられていたので、カザフ語がロシア語と同じように通用するようになってほしいという気持ちがあるわけです。

カザフに対する資本投資の問題ですが、現在18のクレジットラインが世界各国との間に結ばれております。融資が足りないという問題よりも、むしろ融資をきちんと消化していないという問題があります。なぜ融資を消化できないかといいますと、世界の財界に通用する形でビジネスプラン、フィーザビリティ・スタディができないということです。これは国の統計とか、会計処理の仕方がまったく違うシステムなのです。西側では収入を基準にFSや会計原則が作られていますが、私たちのところは支出を基準に作られています。ですからきわめて純技術的な問題ですが、適時にFSとかビジネスプランというものが外国の投資家、つまり企業や銀行に対して作成できないということがあります。そのためにクレジットラインがあるのにきちんと利用されていないという事態があるのです。すでに申しましたが、有名な映画監督でミハルコフさんという人がいます。オスカー賞をつい最近受賞しましたが、目は口よりも広いと言っております。つまり目は貪欲であるけれども、消化力は充分ではないということです。というわけで外国の融資に対してはもっと慎重になるべきであるといまのところは考えています。

終わりに

秋野

最後になりますが１つお願いがあります。昨年私はウストカメノゴルスクに入りました。そこには日本人の捕虜がお墓のないまま埋められているということです。彼らは日本語で板に字を書き残しており、そこに漆喰が塗られて隠されていると。それを調べてくれないかと言われました。その時たまたま事前のビザ取得なしでカザフスタンに入り、余裕のない身でしたので調べることができなかったのですが、そのようなことが多くあると聞いております。そのように公式レベルで調べきれないようなものについて、いずれ何かの機会に探しに出かけたいと思っておりますので、どうかご援助いただきたいと思います。

私はカザフスタンを愛しているがゆえにはらはらしながら見ており、いろいろ申し上げましたが、副大統領からそういう心配はないというお返事をいただきまして、企業の方も積極的に投資されるいいきっかけになる本日の会だったと思います。

カザフスタンはいずれにしても旧ソ連、中央アジア、ユーラシアにおける鍵です。この国がここ１年くらいの一番むずかしい時期を乗り切れば、世界に対する貢献も大きいと思います。そうであるならば日本ももっと積極的な援助もできるかと思います。もっと何度もいらして、そのようなことをご説明していただければと思います。本日はどうもありがとうございました。

後記

秋野が締めくくり発言において、カザフスタンにおける日本軍捕虜の問題を提起したことに対し、アサンバイエフ副大統領は個人的にこの問題に深く関与していることもあり、カザフ政府がこの問題で人道的観点から日本側の意をくみ取り、記念碑、墓参、記録の整備、その他でいかに多くの努力を払ってきているかについて、講演会出席者に直接説明されたかったようです。しかし、残念ながら講演時間はすでに終了しており、副大統領の希望は満たされないまま散会してしまいました。このためこの後記において、カザフ政府が旧ソ連の中でもっともこの問題に関して協力的であり、今後もこの方針を続ける旨の副大統領の言葉をお伝えしたいと思います。

ただ、カザフ内の日本人捕虜の問題は公的な調査により明らかになっている部分のほかに相当の不明部分があり、これまでとは異なるレベルでの調査も必要になりそうです。

つい最近もカザフスタンを訪れた際に、ウストカメノゴルスクで日本人墓地などの清掃に現地の学生が汗を流している姿がテレビ放映されていました。今回は副大統領をお訪ねする機会はありませんでしたが、これはきっと副大統領がイニシアチブをとられたものと思われ、ひじょうにうれしく感じた次第です。